





利達

村子巻

全

利達
3869
7

9
3869
7

之
年
月

大正七年三月寄
室开平藏氏贈

夫世謂於心以爲
之
之
仁此
乃
或曰
之
亦易
也

選海いうてゝあつてもお好人も
 固く結してあつてもお世に
 守じてもふいふてゝあつても
 曰元のお婦を文化の代り
 又せらうてあつてもあつても
 衆もあつてもあつてもあつても
 ありあつてもあつてもあつても
 ありあつてもあつてもあつても

一 衆もあつても

几 塘

此の村子も




合 虫の象をてあつてもあつても
 ナカ 何の因果であつてもあつても
 タセ 大名何の鎧のよ 扱
 カシ ありあつてもあつてもあつても
 二六 後母のあつてもあつてもあつても
 コイ 何れの本を町橋子もあつてもあつても
 八千 衆もあつてもあつてもあつても
 カ十 何れの本を町橋子もあつてもあつても
 ウキ 何れの本を町橋子もあつてもあつても
 下三 何れの本を町橋子もあつてもあつても

シタ 獅子の多子は各物とる世
 サカミ ともみ来て時めを尺地サレ
 カヲ 如く昇る一ーは松ナ大男
 イレ 石印や飯もまね字とまへ
 コカ 此是城をさく老て伊人ナ
 ケナ 下め此物さく如し配刑
 フキ ソウ痛てハテ新森て本島者
 フタ 大老清大子お基はつた
 タイニ 京にて居ケル根子二階の
 サヲ 子通くともさめ此をいひる

ワカ 松々鹿骨の子をやくうおん
 コモス こそもさくさくうワイておの海を
 カタ 刺刀を引くさく死ヲレ
 ヲヨミ 男伴志世城押る如て女房お
 タイ 谷ら此橋のさく見えなひる
 ヲヒ 吉原の焼物屋の住人の
 クチ 義達くさ面を何ともお入
 ムヨ 甲士の竹いよあるを改米
 フ目 ありて此さくさくい源さめ徳男
 ウラシ しくこととさひめ外お折子親

クヤ 若くはあつらふやうも^{ハナヤ} 賢^{ハナヤ}

ハトク 万民をト^トリヤ^ト物^{モノ}を^{モノ}お^おし^しる^る出^出ル

タイ 経^{キョウ}命^{メイ}丸^{マル}と^とま^まひ^ひそ^その^のあ^あ

ロキ 六^{ロク}寅^{イン}を^を虎^コで^で家^カを^を律^{リツ}儀^ギり

アキ 姉^{イモ}の^の泣^{ナク}味^ミ嫁^カ乃^ノを^を歌^カる^る

ヨシキ 縁^縁始^始あ^あら^らむ^むあ^あら^らむ^む仲^仲者^者

ミシタ 皆^皆令^令志^志あ^あお^おと^と一^一人^人で^で下^下付^付ケ

セヲ 香^香隠^隠を^を出^出る^る為^為あ^あら^らむ^む

キヲ 三^三味^味も^も深^深く^く衣^衣の^のぬ^ぬれ^れの^の妻^妻

ツヨ 薬^薬の^のお^お供^供付^付以^以て^て突^突發^發一^一

カ、 大^大門^門の^の札^札よ^よ呵^呵ら^られ^れ下^下り^り

ニクス 二^二代^代目^目の^の名^名を^をう^うり^り強^強ひ^ひ角^角力^力を^を

アキ 大^大門^門の^の中^中に^にあ^あら^らむ^むあ^あら^らむ^む

コス 理^理を^を深^深く^くに^に考^考へ^へる^る計^計画^画者^者

ウコキ 浮^浮浪^浪を^を殺^殺し^しと^とは^はま^まの^のあ^あら^らむ^む

ナク 草^草花^花畑^畑を^を吐^吐き^き出^出す^す風^風吹^吹く

カサヲ 京^京の^のあ^あら^らむ^むあ^あら^らむ^む運^運ち^ちる^る

アニ お^おの^のあ^あら^らむ^むあ^あら^らむ^む子^子

コセヨ 抱^抱き^き子^子を^をあ^あら^らむ^むあ^あら^らむ^む結^結ぶ^ぶ

ヘキ 別^別世^世界^界を^をあ^あら^らむ^むあ^あら^らむ^むお^お供^供付^付

シヤ 仕合の足のお入ると思ふ

サマ 懐い人の徳をばあし

コソ へりぬき物を放り

ウカ 運の業を捨つて冠門角

テモ 出来多依子の抱きかえ

ニヨ 遊ても去りて城見さうり

ヨナ よい女房ふれぬと頼られ

イキヨ 意地つよあさりの足は

シ 仕合の徳サハりあつた

ハシ 高村の甲ふ来てあつた

コナ けさぬくくく尾を

ヨイ よい女房あつた

ヤセ 女房を女史と頼られ

ワセ 女房の居り

ミラ 港母と見ぬ

イラ いらくくく

サマ 伯の物

テトニ 出来を

アイラ 悪人の

ナニ 傾城の

ツキ 暮ら毒の忌日わきれぬ
 ミシ 力よけけの鹿のやけね
 クギ 廊うと敷入もあて指指
 ヲシ 八指あつるさうもそく指
 アヒ 更家うら扇うまて柳うらう
 キタ 碧うくく人さうう海
 カタ 気もつりのみて売いゆね
 ヤシ 考う川う大キうらぬまの氣
 カタ 蚊さう火ハット指も居るね
 ヤシ 山ろ城若さまう臨て家射もあ

ツキ 秋うあましく口惜しひりぬ
 ミシ 一口お子と月この味ー
 クギ 大クやと始来てやう果て葉
 ヲシ 千ヨウカう吸物給うさうさう
 アヒ 近く流る家一せ成便喜し
 キタ 伝うま何やあう丸山あま
 カタ 備うもの好てあうさうさ
 ヤシ 平方の持とん刀の経年若
 カタ 函うくのさうんうと来うさう人
 ヤシ かもさう病人もさう執事あ

ハレ ぶふんをへ姑いしめのうけ
カヤ 泳ぐうめいぐま子ね居ぬけぬ
ヲク 龍母かあゝうめくくる古年
シモ 下やーま持柱ひのの松たけの
シキミ 空そらに雲くもをまことして雲くもを
トモ 遠とほくのおか似にたててあそぶ
ツメス 月つきをうらぐうらぐいけ
ムカス ちのまき花はないまぬ棒ぼうの枝
セイウ 殺生ころん草くさ一いつつ日はるる ナル
ユウ 懐なつれくぬ獄ごくをくく日ひの
六

アキ けつりの葉は漸おそくおまてお入い葉
ヨロコ 心こころの世よをあまごころのぬか
フシテ あか一家いっかに女むすめ居いる中なかあそ
サキ 去いれくうらなえんていり
ロシテ 老人らうじんの人ひとをうって身みをまて
フヨム 二親ふたごころをうめくまはる娘むすめの子
ニヤヨ 女むすめ居いるチャリチャリをまの用もちうめ
ロシテ 老人らうじんのちあまの居いるをおごうま
イモ 入いるく強い居いる娘むすめ入い持もちてお
テヨ 懐なつれくうらぐまをなつ

リト 伴儀者方々へ度々申上り
 合ヤ 村中うらやまてゐるお下り
 タルエ 意の面々へ在るお下り
 トカラ 御つぬえのあふひ多し
 ヘキヒ 子息の申す御切も情を
 ヨハ 候ふお下り候ふお下り
 ヘイフ 平太の御言何事せしむ
 オシム おつぬえの御言の
 ワネ 候ふお下り候ふお下り
 ナク おつぬえの御言の

三三 乃と合ぬお下り候ふ
 合 伴儀の御言御言の
 コモ 備前所領の御言御言
 合 欺すお下り候ふ御言
 コト 候ふお下り候ふ御言
 キタ 生娘の御言御言
 合 候ふお下り候ふ御言
 合 老人の御言御言
 合 平生の御言御言
 アム 御言御言御言御言

ワ

炬^カを^カ十^カに^カ交^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

カ

か^カん^カん^カを^カと^カ交^カり

乙のこに柳あつらる菘入日
乙、 乙久所の乙女を思ふ合殿
三カ、 乙のうらやみと憂ふと憂ふ
ヤキ、 乙の心の内を思ふ
多カ、 乙息を流して百性泣くけり
ナヒ、 乙は外でも能く思ふ
ケヒ、 乙の心の内を思ふ
モイ、 乙は思ふて思ふ
ヲ登、 乙は思ふて思ふ
スミ、 乙は思ふて思ふ

ウニハ、 乙は思ふて思ふ
ヒキ、 乙は思ふて思ふ
カシ、 乙は思ふて思ふ
フ、 乙は思ふて思ふ
トカ、 乙は思ふて思ふ
ナキ、 乙は思ふて思ふ
ワキ、 乙は思ふて思ふ
トキ、 乙は思ふて思ふ
トサ、 乙は思ふて思ふ

占チ ともやうゆやう渡返り系漢喰
 カナ 禿う撮志を皮り之袋
 ヒヤ 人さよといをぬき世捕らる
 毛も 牙のうこれ面角あるみくち
 トカ 赤坊主額口レ系を出る
 カサ 切らう的喰せはあ婦のそ
 オフ 宮の亭今あそ濁の甚よと
 ヤカ 膳うあそ備親捨さしそ
 ナフ 七し日人のふれ網あくこ
 口キ 炊て足せても炊らるかぬ

シカ 快さひしと髪をううあましく
 カシ 赤玉の子を母より見付くそ
 カシ 故旅をうそて心とせしる
 タル 網やけこめキヤあそとあつこ
 トカ 毒よあそ敵病入しうらね
 ハコヲ 母の和火煙の豆うぶくすしひ
 タクヲ 杉拾ひららサヤ捨そとてあら
 セホム 孫のちう坊は角力名あつし
 ヘナキ 毎度ハ何て教つとあつし
 トヲ 名もめしりのふあやう

トカシ 為札を穿ちておひんかお
 マナ 涉以^{あひま}妓婦の實の粒を
 フタ 惜しむ料理を細く味付
 ツチ 宵生の牡丹屋をうらり
 コシ 縁としてを頼親おぬ神
 ケシ ちりかこりさるあけの
 ハシ 花生のチヨコをさけ好む
 巳ホ 浮浪妹侍うらなう
 フシ 腕をせぬ招性と二を抱
 マ 世帯されおの元と内妻

マ 巻^{まき}の^まひ^まの^まけ^まの^まね^ま
 シヲ 十^{じゅう}の^の歌^{うた}母^{はは}を^を伯^{おや}父^{ちち}辰^{しん}
 シサ 麻^{あし}抄^{しやう}の^の香^かを^をけ^をア^アフ^フ
 ケシ 帯^{おび}を^をく^くに^にゆ^ゆへ^へし^して^てま^まル
 ロキ 歌^{うた}を^をう^うた^たふ^ふし^して^てお^おの^のま^ま
 ヨシ ち^ちの^のお^おの^のま^まを^をお^おの^のま^ま
 ナキ 新^{あたら}の^のお^おの^のま^まを^をお^おの^のま^ま
 トモ 暮^くの^のお^おの^のま^まを^をお^おの^のま^ま
 ウラ 幸^{さい}の^のお^おの^のま^まを^をお^おの^のま^ま
 ナキ 法^{はふ}の^のお^おの^のま^まを^をお^おの^のま^ま

ツカ つまみれて新町に居たりし也
 五^{あま} 葵下坂彌の森うみで記す
 ウサ 妻と共一里うつこ運物し
 コイ 五百圓をいづりしは油子
 ハナ ちりこ成りて仲居のひま
 カヌ ぬりりしに任せて料理雑事
 ミヰ 地味きくあそをせひいさ
 ロカ 大文ゆけ程の徳りかえぬ
 ミヰ ちりりて口こ味纏て約を
 ヨ六 ちりり人娘も嬌も殺しし時

キク 柳文のけあつたのふあのも
 ケサ 常さいくう内一に成りしよる由
 ナト 七代へ依りしにたれぬも
 スキ 摺鉢成持つたの利と記
 ナハ 大切サちりし一を後立る
 ナイ 惣人にかかひわけなき色深し
 ナシ 行々好くも忘れぬ 傷人
 ウイ くらひいれぬか屋へ寄し
 スキ 好くも中仕りやうと記す
 ナイコ 飽のあそを記すの多し

シラ 奇宅のせむらふナト降るれ
 ハト 懐きの懐きさうこそ通いぬ
 キシ 二あゆむ日ハワルを 決めぬ
 カム 片は花 晴くても云娘なり
 ヲク 杖つらぬ 咄めく 後知あつた
 スルメ 角力丸の流 流るるあめめ
 共ウ 柳えさる 妹そと 海へさる
 ハミ 後をさせく 刀を 後をやく
 シラニ 掛進をぬき 流して 碎りぬ
 へ ちたもの 旗といつて 面は

ウタ 悟りゆく 玉袖てきて 玉
 ヲル 近きあつた ちるまは 偏父伯母
 キ、 主人のひきとて 知る
 全 ちるまあつた ちるまは 主人
 全 狐う 返して ちるまは ちるま
 平ノ ちるまあつた ちるまは ちるま
 ウキ 猶く 掃く 古日の 塵
 ハレ 鼻をぬく ちるまは ちるま
 今 八軒 ちるま ちるまは ちるま
 トシキ ちるまあつた ちるまは ちるま

七モ すすきさひの如くあきあき
 全 ちまの味をたぐひあつたの
 カエ 有病人のふんころ せきせき
 ハモ ちりちりして揺ゆり揺ゆり
 金 向くところを海に漂ふまゝ
 奈イ ちりちり揺ゆり揺ゆり
 イダ ちりちり揺ゆり揺ゆり
 ニダ 似てはやくはやくはやく
 ヲホク ちりちり揺ゆり揺ゆり
 カサ ちりちり揺ゆり揺ゆり

ヲホカ ちりちり揺ゆり揺ゆり
 ナヤ ちりちり揺ゆり揺ゆり
 ノヲ ちりちり揺ゆり揺ゆり
 ルカ ちりちり揺ゆり揺ゆり
 ロヤ ちりちり揺ゆり揺ゆり
 ナナ ちりちり揺ゆり揺ゆり
 カヨ ちりちり揺ゆり揺ゆり
 ミロ ちりちり揺ゆり揺ゆり
 アキ ちりちり揺ゆり揺ゆり
 レト ちりちり揺ゆり揺ゆり

トラ 陸あそこのつてはける男好
 シノ ぬくちしひのふ金の指
 モリラ 文青て二代も又吹射る
 アモ 明放し遊人のくろくろひ
 廿幸 石まなをばつふ母のちのまサ
 イカ づりまも冷コイとあし吹先と入サ
 ヨロ 持入る延て抱き抱ふまう
 シサ 扇のまきこひる桶の機
 ひと ぬくちりてはのやうなひ、松
 せむ 白ちりのあしを文金の十分

せむ せめてもとと先と後との機は日
 サヨ 成布よゆを延りてくるまう
 シユ 小はちまをちかぬるもこの機
 スチ ともちのぬくはをけりぬる
 ヒト 比身若とあしを吹射るかせ
 フス ちあの日及あちあては着と侍
 イノ ちのちもぬくは吹くま日
 ナナ 思ひあちちのちもあちあち
 フサ ちのちもぬくは吹くま日
 セラ ちのちのぬくは吹くま日

一 此の向ふは女房も侍も
 イエ 一 此の向ふは女房も侍も
 サイ 一 此の向ふは女房も侍も
 アタ 一 此の向ふは女房も侍も
 ハム 一 此の向ふは女房も侍も
 ハナ 一 此の向ふは女房も侍も
 フク 一 此の向ふは女房も侍も
 イル 一 此の向ふは女房も侍も
 テニ 一 此の向ふは女房も侍も
 ヨイ 一 此の向ふは女房も侍も

クニ 幼き時女房も侍も
 ニニ 幼き時女房も侍も
 テウ 幼き時女房も侍も
 ヘト 幼き時女房も侍も
 ハメ 幼き時女房も侍も
 モヨ 幼き時女房も侍も
 ムト 幼き時女房も侍も
 カカ 幼き時女房も侍も
 フユミ 幼き時女房も侍も
 フヨフ 幼き時女房も侍も

ワカ 笑ふて尺やと流うり流り付りのあ
ヤウ やうくみて牛い能ま此こあ
キカ 義ぎ理りううははりりてて響うくくささうう鳴な
カキ 千ちヨよシし史しふふああももささにに性じやう根こん魂こん
コス 子こ成じやう抱だててああののままくくひひ
キス 弟あいいめめりりああてて出いぬぬけけぬぬ
カスヒ 如に人にままををささるる虫むしののままをを食くひひ性じやう
ヲハイ 流うぬぬららふふ身み志しをを入いれれるる
トウ 葉は依よりりのの尺しち松しょう葉はままひひ
ホノ ちちくくとと外がい孫そん多たふふととままふふ

トカ 戸とををぬぬききままのの嶮けん折せ
トウ トとウうレれはは心こころのの売うれれッッホホ
スミ ねね探たるる身みりりああののままをを弱よしし
アレ ああそそろろ水みづをを松しょうのの影かげのの繁さか
フシ 振ふ角かくカカトト神かみああるるはは扇あんん降ふルル
ハ、 ハは陳ちんああるる母ははとと隣りんつつ
キツ ささぬぬとと傍そばぬぬ抱だのの抑おひひ
ハモ 揚あげげてて尺しちとと本ほんええささとと
ウチ 疑うたた今いま流うりりいいろろうういいひひ
シテ 什し合あおお娘むすめのの母ははののちちととままふふルル

分ハ 摺のさうすおのゆる 船の地
 点 ちりしきまを 船の針体
 トウ ちりしきまを 船の針体
 トア ちりしきまを 船の針体
 ウヤシ ちりしきまを 船の針体
 マモ ちりしきまを 船の針体
 マツ ちりしきまを 船の針体
 イシ ちりしきまを 船の針体
 マモ ちりしきまを 船の針体
 ツコ ちりしきまを 船の針体

シラ ちりしきまを 船の針体
 モハ ちりしきまを 船の針体
 ヨサ ちりしきまを 船の針体
 マシ ちりしきまを 船の針体
 アト ちりしきまを 船の針体
 トサ ちりしきまを 船の針体
 キコト ちりしきまを 船の針体
 サカ ちりしきまを 船の針体
 イロ ちりしきまを 船の針体
 ウネ ちりしきまを 船の針体

ヨ升 我の由得る此も運まび
 キヲ多 利そふよとふ此の草満み
 クヨ 草もみ又と慈よふりりり
 カテ 我合と此よたのよと度ひら々
 トハ 花やうよまゝくぬこし
 ホフ 合て出ス草よ二人手越出に
 ツネ 隠あてぬ人のていあ入だん
 モヨ 色る物子てはあし物あか
 フフ 身成親くう并まれの供
 コシ 傳に女らの男ら付く極よ芝居まる

アセ 海うは海とやあめあの人と川
 ハチ 後立のちえよみある子ら川
 ヘモ 一へん人ら改の仕し解とく又もあらわ
 ツタ 夫も男ら見も男らて役やくあらし
 カヒ 加人か人ら奴ら違ちがふあら人らだらう
 マネ 手て計けいくくぬぬ役やく仕しさらぬぬ
 ナヨ いららららよよ連れんの白しろ髪かみくくあらわらぬぬ
 ハミ 程ほどのあらわらてて入いんんあらわらそそよよ也や
 コハ 極ごくくくあらわらよよ花はな柳りゅう之の魂たま香か
 モカ 中ちゆう止し傳でん傳でん外がい科か医い者しや痛いた症しやう

クサ 赤くく管て赤く赤く小サイ
ヲコ 押合る一合胡奴丸吞
イ多 赤く赤くたけをせせの
ヌシ 縫ふ内+ら赤く赤く白小種
シラト 腎葉赤く赤く赤く赤く赤く
ウチ 疑ふく赤く赤く赤く赤く赤く
カク 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
トモ 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
ト、 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
赤く 赤く赤く赤く赤く赤く赤く

テフ 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
ムク 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
ムネ 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
ロミ 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
トリ 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
セム 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
ヨシタ 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
チウ 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
ヲヤ 赤く赤く赤く赤く赤く赤く
ト高 赤く赤く赤く赤く赤く赤く

キヒ 又いふ事いふをいふと信しんず

コキ、 コナ 義理家の伯父おぢよいいまぬ

タコ 大膽おんよぬい冷ひやコイ

ケレ けいせいよいわられては嬉しい

ヲサ 本ほん仕じ色しきをまてはぬまふ

テハム 歌うた味あじをあげたことは二にの中

クリム 廊くわんの懐をいぬは狗いぬうち

コサチ 小こ布ふといては信しん者あやのちをうちに掃はく

コホ 情こころをいぬは抱かかりぬまま

サホテ 石いしの碎本ほん性じやうではぬは燭しやくの灯

ヨシ 独ひとり男おとこぬい男おとこはあらうとれ

トノ 踏ふみの線せんのつーし振ふ

クイ 信しんの門守まもりの家切き色しきを持

モレユ 室むろ少せう信しん色しきぬはぬはぬはぬはぬは

タヒウ 代かへも一ひと人りてはぬはぬはぬはぬは

ハヒ 侍さむらい政せいの門のままとあらうらぬ

ヤニ ヤレくあらぬは起おこ板いたを返すく

シム 出い世せ仕しヨともい世せのままにし

ハレ 遠とほ入いとはぬは尻しつ持ぢの門

ヘイ へんご生せい女にょ子こと新ルる異い信しんや

ナラ 生ぬらけら男ゆらしら
 テラミ 天都のあつとをたつらまを
 コハヨ 是つくと斗結あぢのつとのし
 クサ 池伏くみふせて刃リヤせん惚ねとの
 イコ 命よも結ぬ女三層こころの
 ヤロ 心さつと居る櫓屋うら
 シモ 十二洞と山くくかぢ招つあめ
 ヤレ 体たて切きとほらあ千ヨロし
 シウ 毒室やくむのトまよふ角力
 シヨ 身みよさつとつれつのまは合

タイ ちまうしとつあま一級
 アハ 危あやしうあまこころ知る屋あ
 ツキ 結身つんがともまを招つた招つた
 トウ 解とつとくさるさるぬさる
 シホ 一つあま二つあまを所から
 ロツ 六アの腕うでよまあれ伝名
 ユウ けつとくさるさるぬさる
 ナナ 欠るあつとぬたよ同く
 シラ 互あひあつとあつとあつと
 イコ 云いふあつとあつとあつと

一ツ 二ツ 三ツ 四ツ 五ツ 六ツ 七ツ 八ツ 九ツ 十ツ
 コエ 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
 カガ 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十
 ク、 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十
 トシ 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十
 タイ 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十
 テイ 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十
 アハ 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十
 ナ下 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十
 ニガ 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

ツキ 一ツ 二ツ 三ツ 四ツ 五ツ 六ツ 七ツ 八ツ 九ツ 十ツ
 ヲコ 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
 フチ 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十
 フー 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十
 ナク 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十
 アタ 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十
 カコ 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十
 子テ 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十
 トス 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十
 タチ 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

シタ 地こくへ居て大なる痛
 リ多 笑りしるるも世の世なる痛
 ロト 百の難^い事なる事なりし百
 口言 鬼神やのちかちか言傳し
 キ一 切ぬけて旅を思ふ 雑^い無
 ムカ 昔も今も心とあそぶに押^さ
 ミア 路をたづねてあつた情大
 キハ 義理法の信^はよき世の流
 子言 さあまに我^の悔^みてあつた女房
 全 付^けた苦^しいしつらうに 變^はりたる

棄 本心へ居てこれに決する心
 全 侍政を思ふにわづらひし
 スミ スハ接^かふといふれは 呪^ま
 ミキ 人なる我をさるるやうに
 口言 知る人よそへは 強^いあつた
 手 折棄此娘のまじり切らぬ
 イテ 今のといふももうあつた
 サム 海外へして看^まいあふをよ
 フハ 誇^りなく内^の母の苦^しうを
 手 誇^りる御^の庭^へに 釘^をとす

ウカ ぼけてしるい梅てらるる
 多 小使て振桶を扱しと旅の
 皇 一調子よはれ遠ふ村山ふ
 一巻 いろじこ巻よ方の如く
 ハレ 盤花のふいさくぬ振賣
 カミ 箱付を足ヨト巻と負格
 子キ 時子巻めけて結まの事と
 トモ ともさすぬい餅好の伯父
 イロ 入んせと足止て侍巨健の
 ムシ ちし止國おいてとあまの傳ふ

子 多穴をふふふらんで小使
 子 檄送ふさすしやんあ母
 カウ 雷の伝のむ快うのあす
 子カ ツイ屋シヤやと世あ海傳上
 フレ 武運つこまく七人の網
 本ウ ぼつちりい好と足てのら屋の
 フウ フレもそふてあると
 キウ ころわもよまて叙伝の
 子下 是子居足て房の好い
 フリ 子(神をとりくさ料理人

セナ 世界の旅とゆりし白粉
 ミラタ 皇碑ヤト碎し母の巻所
 サホ さういせ筆ま彫め時多
 タタ 懐きま一箱さういふ味
 コウ 博庫いふ物ありてさ
 ホト 持よりまゝに吃よ吹出ス
 タイサ 大名いふの換して所遣ル
 ハチ 陰のしんちツトイ似於地子
 テレ 子物死怖ハ焼巻るいふ
 善 縁信よ物をて見るあつた
 ちい

コト 母のやうにさあまむらさきん
 タカ うるそあまおと金舞よこ人
 ナタ ちまひさうりかこさあまやま
 スラ 海戸んそほてりておら女うこ
 タハ ころくわりテ箱ハ先へをり
 ニイ ちんちんちん 掃ていぬり人
 ナキ けいせんよらんれれいふ
 ナキ ねんごういふ代やうこさのね
 フシ ちんちんをいふよあまあま
 ヲヨ 運送の海の女ハあまを指

大入

サク 逆刺さくぞうさくひらさくはらうけ

シク 借給かかへはじりあつる長春町

キキ 作天かてんの歌いそ終りあり

アキ 諦あきら断めつふりて返

サク 三川さんせんちりり口のさる謀内

ミフ くのきと本て女の字を引

キト ちよへんくく種く女のまじり根

カト 出出いっしゅもんぬい付居くの根性こんじやう

ワモ ツイちよこのてきうなるあつる

ヨク 独りりひとりりとくはけいひ外

モロ 寄よあつてせともくく一いちつ

イタ 去いてそよよす得とくふさぬ

ハキ 後のまきり片けらさるる

ハユ 子あつめは遠くへんはいん

タロ 狂くるを味入あじり打うちけられ

ヨセ 寄よてけいしあ教しやう丁てい能にぬ

サシ 俣まりりいさつりぬ 大名

ホチ 本ほん書しやうへくくき種しゆふゆの事

ロモ 櫃いを指さしてあつるあつる

ミヤ 方かたはあつるあつる腰こしをいふ

其 出して子^{不め}を^たら^せられ^る
 夢 万^たく^し居^る家^の事^は何^れも^ない
 名 萬^事皆^く備^へは^れず^も遠^くに^は遠^く
 今 是^れを^もた^して^はハ^レキ^トハ^レキ
 フチ 大^にハ^レキ^テは^レキ^トハ^レキ^ト
 カタ 傘^の影^と大^に吹^られ^る
 フホ 啞^の之^をハ^レキ^トハ^レキ^ト
 カ、 遠^くに^は遠^くに^は遠^く
 名 抱^き合^ふ事^はハ^レキ^トハ^レキ^ト
 フタ 伏^し入^る人^はハ^レキ^トハ^レキ^ト乃^お

名 陣中^の部^料の^居る^所ハ^レキ^トハ^レキ^ト
 キ 未^だ陳^る居^る居^るの^居る^所ハ^レキ^トハ^レキ^ト
 フキ 万^事皆^く備^へは^れず^も遠^くに^は遠^く
 アシ 秋^の之^をハ^レキ^トハ^レキ^ト
 ナア 名^の所^はハ^レキ^トハ^レキ^ト
 フコ 万^事皆^く備^へは^れず^も遠^くに^は遠^く
 フ、 萬^事皆^く備^へは^れず^も遠^くに^は遠^く
 ナト 萬^事皆^く備^へは^れず^も遠^くに^は遠^く
 フヨ 萬^事皆^く備^へは^れず^も遠^くに^は遠^く
 フタ 萬^事皆^く備^へは^れず^も遠^くに^は遠^く

昔 他病ヤヒの義医者より来て終しんの
 命 ちりまう一室の探たんを業わざに
 カサ 命より上よまひ女の居
 シキ 人ひとの室むろのいひさるのよも かな
 口ト 一室をこころまふよあひなうを
 ニト 二階くこみ入居うしてまヌ
 テス てんさうきとて指押さしおしのき
 ヲチ 親あのみもまいたし何何て話
 カ、 神かみ秘ひうとけねそよまは
 多 明あきら松まつのあまひく方かたはあのをま

スウ 涼すず巻ままの神かみのまうぬ把つかの
 也や上 先ま身みと過ひら寒さむまののまなる
 サム 之こ石いし見みるまむらあつ
 マニ 私わたくしさうあまのまを一ひとかせぬ
 ハキ 花はなてまのまをこまのまは
 多た 身みよまのまをまめつ
 こキ 又またさうまのまをまめつ
 奔はしへ 谷やのい色いろのま下したまてぬ
 ヤウ ヤレ室むろ後ごヤと内うち入いらまひ
 口くち 命いのちを愧はて一生いっせいうらま

カア 岡ふと二人入るく新痛
 ヲウ 大勢の娘を嫁とつたは
 シ、 借金の倒て大丈とみ極ひ
 キケ どのそけーさう下流な
 カサ 娘を嫁とつたは新痛
 ヨイ 母村ウツクく新痛
 イシ 人さんより入るの女と
 ナカ くの母極な合鳥の用
 ムシ 母の細い新痛
 キエ 母の娘を嫁とつたは

スワ 母の娘よ〜〜〜
 イシ 母の娘よ〜〜〜
 ヒラ 母の娘よ〜〜〜
 キワ 母の娘よ〜〜〜
 ホウ 母の娘よ〜〜〜
 トコ 母の娘よ〜〜〜
 ちり 母の娘よ〜〜〜
 ヨニ 母の娘よ〜〜〜
 テツ 母の娘よ〜〜〜
 ムシ 母の娘よ〜〜〜

奇 舞のこころを舞ふまゝの
 才 仲んろアノ金を金と拾
 才 づらまぬろ人まはさぬ
 イヨ ろの世あやと路入るん
 才ヨ 句よてろろろ我を強ひ
 才ヨ 金物の下たもろの物何
 アサ ぬいふかて樹人ありて
 カキ めんろ人のぬろまゆの
 セス 海のをろしてはろる葉の
 才 終あろろろろろろろろ

フロ 田かのおまろろろろろ
 イア 今ぬろろろろろろろ
 ロロ 雲の霧ろろろろろろ
 才 葉ろろろろろろろろ
 ヲロ かろろろろろろろろ
 才キ 信よ上屋ろろろろろろ
 ニフ 二五ろろろろろろろろ
 アカ ぬろろろろろろろろ
 イキ くとまろろろろろろろ
 才チ ちろろろろろろろろろ

ヲス まうらうらうと寝ぬ人
 ヲキ 息持し鯉乳もひのき
 ヲキ 網あし中まうらう人
 ヲキ 川のわたり人ひのき
 ヲキ てちんて松あまのり
 ヲキ 歌あまのり一あまのり
 ヲキ 慈のきあまのりせ
 ヲキ お中よよと二月あつ
 ヲキ をゆるさゆよまのり
 タワ 大字の長あまのり

キカ 後仕人あまのり
 イク 猪のことく人あまのり
 イス 店あまのり女あまのり
 イト あまのりあまのり
 ヒキ 修打のあまのり
 ヒキ 人のあまのり
 ヒキ 乳あまのり
 タテ 抱あまのり
 テイシ 妻あまのり
 キカ 後仕人あまのり

ニラ、 女房のあはれなる使くる
 チク 髪洗て巾着サリハ 疵
 多ロ 左竹の合つてモ扱百自忌
 ハリ 後のまじりあつとの絵を画
 イハ、 云々ありてはち中秋遊
 ロハ 之れはまじりては猿の合傷
 タカ 性よアレハわらぬまや
 フヤ 糸よは飽てまじり定る
 コサ 子のまじりの代のうち
 カヲ 片及のまじりては約束を

眞 治よあるおしやまきん
 己よ 舞写るまじり面白那乃元
 二サ 二重まじりまじり春成布
 ヨモ 世成持まじりては世成の衣
 コシ 世の相まじりては世成の衣
 タイ 太即まじりては世成の衣
 多ク 世の相まじりては世成の衣
 アツ 世の相まじりては世成の衣
 レア 世の相まじりては世成の衣
 カサ 世の相まじりては世成の衣

トセ ころろと寝入と喜室の下女
 ハヨウ ハテあせりよるねく居いひ
 云カ 糸線と上座流子と物子
 イタ 色も喜もみ出いしの莖くさ
 スナ 節せうやの店みせなれると嫁
 キカ 中ちゆうふる物もぬのているいぢぢ
 ナア 赤あか子これれるるののああささ 候うぬぬ付け
 五五 侍しやうと喜と喜女きよの芝居しばいに
 六六 時ときささとああつつとと味あじささらら
 六七 春はるぬぬけけをを招まううをを風かぜ色

八八 中ちゆうふる物もぬのているいぢぢ
 九九 赤あか子これれるるののああささ 候うぬぬ付け
 一〇〇 侍しやうと喜と喜女きよの芝居しばいに
 一〇一 時ときささとああつつとと味あじささらら
 一〇二 春はるぬぬけけをを招まううをを風かぜ色
 一〇三 中ちゆうふる物もぬのているいぢぢ
 一〇四 赤あか子これれるるののああささ 候うぬぬ付け
 一〇五 侍しやうと喜と喜女きよの芝居しばいに
 一〇六 時ときささとああつつとと味あじささらら
 一〇七 春はるぬぬけけをを招まううをを風かぜ色
 一〇八 中ちゆうふる物もぬのているいぢぢ
 一〇九 赤あか子これれるるののああささ 候うぬぬ付け
 一一〇 侍しやうと喜と喜女きよの芝居しばいに
 一一一 時ときささとああつつとと味あじささらら
 一一二 春はるぬぬけけをを招まううをを風かぜ色

ホフ 惚人のまゝふまをよる
 地まのむ侍て大ねの侍て
 ハケ 子ふらけけいせいのま
 音 家外よやくきやくし
 △カ 蕨おころる新の師持
 七三 長のねん引とるねあひ
 高きろく朱一とりのあは
 何ヨリヤル折角多と居
 クレ ぬい病をて下ふ子は
 メコ 服をさるくよき女のま

セム 祭中をいけよや胸へとこれぬ
 三ト 吾も路や約二路は遠ぬ
 クタ 碑て用よたことの人
 イタ 今よ乳を天官人のほあ
 カキ 因ワレの母も知あはるはし
 二アカ 又折もろくもと法を
 コシ ぼあぬり亭まの侍
 ヨキ 縁なき縁持の日は際
 七三 交あしとわけるの仕
 ナシ 髪よと所記よけり

地づく耳ら出さして
 海通るわろんゆらゆら
 一門は流るるぬと
 狭かき舟の内の情
 沙の身よと天へか
 時^{スナリ}の時の抽き
 命^{スナリ}の命見せ一人
 文出とれんふい
 高直田金の鍋と
 祝儀

廻板も古鍋も
 おもひをた
 復こし仲人の
 大門は板を
 ちの連て
 侍よ
 仲人
 慰
 来し
 送り人の

カチ 垣越は懐もけしあきま
 カチ 天祥の担飯取めてる
 カシ 尾草目じきおしなやの
 カキ 一二軒茶屋を連坂越り
 スキ 茶を飲たてんせらるるのそり母
 ハシ 花の山あはれよる前庭を
 モト 艾片もよそり人待ッ
 スキ 茶を飲たてんせらるるのそり母
 フ子 獲る茶もよそり人待ッ
 フカ 人々をよそり人待ッ

ワシ 垣越をよそり人待ッ
 ヤシ 山伏をよそり人待ッ
 クモ 茶を飲たてんせらるるのそり母
 カカ さし向いてんせらるるのそり母
 コキ おゆきをよそり人待ッ
 ツタ 茶を飲たてんせらるるのそり母
 ヤキ 茶を飲たてんせらるるのそり母
 カコ 茶を飲たてんせらるるのそり母
 カキ 茶を飲たてんせらるるのそり母
 ツヤ 茶を飲たてんせらるるのそり母

力を 西内祥^まある程の人皆他人
 ヲヲ 能^まき又^ま厄^まもも^ま出^まれ
 官^ま 古^まの付^ま一生^ま彩^ま六^まより
 カ^ま 困^まコレと^まおへ^まつ^まて^まお^まま
 ワ^まキ お^ま儀^まの^まくら^まを^ま掃^まて^まお^まら
 年^まヒ 下^ま統^まあ^まく^まし^ま何^まを^ま病^ます^ま日^ま和^ま
 カ^まキ 唐^ま儀^まの^まち^まあ^まり^ま口^まと^まあ^まら^ま
 ク^まタ く^まら^まう^まの^ま刺^まま^ま一^ま人^まう^まま^まあ^まぬ
 ナ^まメ 名^まく^まや^ま草^ま茶^まと^ま湯^まの^まぬ^まれ
 ワ^まカ 家^ま子^ま惚^ま子^まへ^まお^まぬ^ま着^ま板^ま

差 厨^まと^ま上^まを^ま保^まく^まけ^まる^ま
 コ^まナ 極^ま楽^まの^ま地^まと^まく^ま義^ま深^まく^ま文^ま
 カ、 怪^まあ^ま掃^まて^ま作^まる^ま髪^まの^ま結^ま左^ま
 今 未^ま元^まの^ま牛^まの^ま刀^ま銅^まく^ま
 子、 亞^ま切^ま人^ま町^ま寧^まよ^ま涉^ま突^まく
 ナ^まメ 修^まめ^まへ^ま陶^まも^まあ^まと^ま遠^まは^まと
 キ^まタ 色^ま二^ま四^まく^ま婦^ま掃^まの^ま掃^まの^ま口^まと^まぬ^まケ
 フ^まミ^まタ 筆^ま米^まち^まう^ま志^ま産^まよ^まめ^ま旅^ま日記^ま
 ナ^まメ 伝^まと^まや^まり^まの^ま何^まも^ま有^まれ^まぬ
 ス^まラ^まッ 好^まく^ま日^ま士^ま史^まぬ^まよ^まぬ^まて^まと^まあ^まら^ま

キイ ちよと入るいんぬまの突
 手 ちよと伝や全と更いんのいん
 レロ 引らぬと世世の日はあ合
 手 ちよとくりとまのいんのいん
 手 女もももよいんのいん
 カタ 困人よ又まよつて時豆
 ナカ 行つて林といさめをいん
 スカ 角力もあをいんのいん
 ナカ 企と池とまよいんのいん
 ナカ 古狸いんまよつて出る

ナカ ちよと入るいんぬまの突
 レテ 借よ入るいんぬまの突
 ナカ ちよと伝や全と更いんのいん
 カタ 困人よ又まよつて時豆
 ナカ 行つて林といさめをいん
 スカ 角力もあをいんのいん
 ナカ 企と池とまよいんのいん
 ナカ 古狸いんまよつて出る
 ナカ ちよと入るいんぬまの突
 レテ 借よ入るいんぬまの突
 ナカ ちよと伝や全と更いんのいん
 カタ 困人よ又まよつて時豆
 ナカ 行つて林といさめをいん
 スカ 角力もあをいんのいん
 ナカ 企と池とまよいんのいん
 ナカ 古狸いんまよつて出る

ケカ 今般へおるま流みか
 ヒシ 一人歎く踏多く喰ひ
 アミ 巻を指すは留前より二珠一
 ハハ 獲母へ改まるも獲ふあり
 イキ 之地懸へ仲人おくる母
 トキ 及々やまたまきふ今よ室也
 ニコモ 悔すれまは力代り持ませぬ
 ニヨヨ 方より引てくれお東の弱
 ヒスキ おとらたて功表るま作
 ハカ 増々のちかぬ中女侍り耳

ハキ 流もはあま百方のの流
 アカ 尼古よ婦入をまらかり人
 タスス 仔在さるるの入る女の孫掛
 ヌキス 腹時うまむらむ角力も
 トロ 飛して落し人をおくる
 ニヨハ 女房狂おすまの道也
 ニカミ 客まの白して大馬も入る
 ナシラ 名の一字もまをける老の喉
 シヤ 壇茶をくれと足てやこ
 ハウキ 張借て肉の破るまあ付ぬ

多 採り 他を以て其を
 考 跡法に傳へぬ一たびは其の
 考 候とて其の考の考の考の考
 ア 堀梅の及相あるるる出ル
 考 候とて其の考の考の考の考
 コ 名人の考の考の考の考
 コ 名人の考の考の考の考
 コ 名人の考の考の考の考
 コ 名人の考の考の考の考
 コ 名人の考の考の考の考
 考 名人の考の考の考の考

考 多々一考と考の考に候や
 考 果報井の考の考の考の考
 考 考の考の考の考の考
 考 考の考の考の考の考
 考 考の考の考の考の考
 考 考の考の考の考の考
 考 考の考の考の考の考
 考 考の考の考の考の考
 考 考の考の考の考の考
 考 考の考の考の考の考
 考 考の考の考の考の考
 考 考の考の考の考の考

キミ 糸を引てんてん糸の首まげ
 ナナ 女を引てんてんぬかんじん
 ハハ 年けの短せんぬかんぬぢぢり
 ミツラ 糸を引てんてんぬかんぬぢ
 アキ 尾も女を引てんてんぬかんぬぢ
 シツ 幸抱しんぢのまの女房にやうぼうの短せんぬかんぬぢ
 カキ 流ながす短せんぬかんぬぢ
 フタハ 糸を引てんてんぬかんぬぢ
 アサ 糸を引てんてんぬかんぬぢ
 タシ 旅たびのふ自由じゆうは短せんぬかんぬぢ

早 火ひの清きよとさせるてんてんぬかんぬぢ
 ウテ 文ぶん出でてんてんぬかんぬぢ
 名也 短せんぬかんぬぢ
 カケ 糸いとの短せんぬかんぬぢ
 甘茶 甘あま茶ちやと糸いとと短せんぬかんぬぢ
 トニ 短せんぬかんぬぢ
 世毛 短せんぬかんぬぢ
 フカ 短せんぬかんぬぢ
 公ケ 短せんぬかんぬぢ
 延也 短せんぬかんぬぢ

ナカ 長刀持の教の長守のどけこ
 マキ ちかひのやめくあつていぬ
 カ、 喉よりやうらぬ防かきり
 ヲク 是る中しゑ信本ちんしゃ
 マ 二月と續くぬ中子ておぼ
 シラ 小使のまゝむすのふあり
 ロス 伝ついで知る母様おん先とほしかり
 タタ たくまひしりぞろに思ふ
 ヲヲ 是れ意よめる親の序を地
 アハ ちかひの母のよめりり

オス ちかひの母をさしおとる
 タキ ちかひの母をさしおとる
 ヒヨ 大よめてふまの約を
 カヲ 之を扱つかくぬいつよぬ
 スタ 扱つかひて抱かかりてん
 タキ 届とどちて信しん一いつふあつて有ある
 ヲリキ 辨わ別べち方かたのちひやぬぬ
 ミタ ちかひの母をさしおとる
 コシ 是れ中ちゆうの女によ史しめりり
 七半 能い考かうて付つりて果はるはる

フク 振るゝのほし^{ほし}一と人を毛

ウモ 供のちもてふるふ 又

クシ せん^{せん}陳とな陳と賑うもめてを

クシ 曲輪の系^き理も^も知^ちて^て熊^{くま}母

タタ 勤^{きん}よ^よ以^い内^{ない}て^て出^でせ^せう^う使^しま^まい

チキ 所^{ところ}扱^{あつか}い^いを^をう^うく^く文^{ぶん}く^く二^に益^{えき}取^とり

カウ かた^{かた}り^りさ^さも^も辨^われ^れも^も紙^し屑^{くず}

ヨカ 世^よ後^ごり^りい^いび^びア^アニ^ニの^の怪^{かい}業^{ぎやう}仕^し

トモ 牙^は仕^し進^{しん}ら^らも^も来^きり^りヤ^ヤ長^{ちやう}わ^わう

シヨ 牙^は代^{だい}ら^らよ^よい^いと^と仲^{ちゆう}人^{にん}の^の意^い志^しを^をん

セホ ちのつよ^{つよ}い^いん^んの^の物^{もの}が^がて

カハ 垢^かよ^よ失^しれ^れる^る画^えの^の指^{さし}さ^さ

チキ 出^でま^まを^を生^{せい}拵^{しやう}す^すら^らい^いと^と拵^{しやう}も

ロタ 一^{いっ}つ^つく^く其^{その}の^のと^と遠^{とほ}く^く足^{あし}指^{さし}子^こ

ヨカ 子^こよ^よ死^しを^を他^たの^の指^{さし}の^の指^{さし}隣^{りん}

フシ ニ^にツ^ツは^は出^でて^て懐^{なつか}し^しま^まを^を分^わ

ロタ 一^{いっ}つ^つを^をい^いち^ちも^も拵^{しやう}え^えを^を拵^{しやう}す^す

ヨカ ち^ちを^を拵^{しやう}す^すを^を拵^{しやう}す^すは^はい^いも^も拵^{しやう}す^す

カヌ 皮^{かわ}切^きり^りの^の角^{かく}カ^カを^を

シヨ ち^ちを^を拵^{しやう}す^すを^を拵^{しやう}す^すは^はい^いも^も拵^{しやう}す^す

且 乃とを遠て礼をたす者哉
 ロス 一ちうしそののりう 能おは
 ヲシ 面白さうらうも 喜ばていふ
 トカ 友達の男も 叫び泣かぬ
 キレ そのよとむし け人とあり
 ハリト 花やうれ うれしうとて
 トキ 友達の 喜ぶとて うれし
 ヲロ 礼をたす 物と一人 喜ぶ
 コモ 子うけを 止し 友を
 夏 子の 親め ぬる うれし
 余

孝 猿皮の門のまゝも うれ
 ヲトニ 子うけを 止し 友を
 ヲキ 子うけを 止し 友を
 冬ラ 礼をたす 物と一人 喜ぶ
 ヲロ 子うけを 止し 友を
 トカ 友達の 喜ぶとて うれし
 カテ 友達の 喜ぶとて うれし
 冬コ 友達の 喜ぶとて うれし
 ハヨ 友達の 喜ぶとて うれし
 トキ 友達の 喜ぶとて うれし

シタ 及^た其^の娘^り人^はま^られ^た扱
 二^番 二^階機^帯一^室て^サア^ハバ
 変、 行^をま^らし^めぬ^とこ^ろに
 方^イ 二^世と^も栄^くを^記せ^る振^り
 ウセ 一^かく^と向^き迎^めぬ^とこ^ろに
 千^千 知^る者^も入^らぬ^とこ^ろに
 多^ク 候^を好^む連^の終^りと^もウ^ガ
 幸 屍^を好^む母^の名^を扱^い
 ウ^ウ 赤^てと^る夫^まサ^ハ男^下り
 写 女^とく^ら孔^を死^に處^て

一^番 三^よろ^くと^日に^取ら^れて^居る
 シハ 知^り扱^てぬ^る母^の名^を
 ト^カ 何^れと^も申^す所^の機^帯
 変 一^る扱^場も^も流^しぬ^と
 カ^ム 扱^られ^て村^に一^名 病^い
 一^ト 勢^が弱^くぬ^と世^の仕^事に
 三^番 運^され^る處^をと^りて^仕事
 変 骨^折て^清く^しぬ^とこ^ろに
 三^リ 運^めら^れる^所の^新機^帯
 三^方 運^めら^れる^所の^新機^帯と^入

三 師匠よきぬあゝ鮎の味
 二 又其の味しやとつてわづらふ
 一 勢ホトハあせめけつとくつとせ
 一 信ちとて養有る鮎の味
 一 井のあて原居もあふ初め
 一 しの跡を仲居ろくつと
 一 けつとてあお後の味を
 一 鮎日和鮎よくくゆ車
 一 飛ら〜〜危ち〜〜あ〜〜
 一 万のあ〜〜あ〜〜あ〜〜

三 忠と持けを海〜日わゆる
 二 舟をよき連のあ〜母を
 一 鮎の味妙せあ〜あ〜あ
 一 こそよ〜い内仲人あ〜あ
 一 ち〜あ〜い抱ひ抱〜信の母
 一 火〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 一 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 一 樽のあ〜あ〜あ〜あ〜あ
 一 及〜遠〜あ〜あ〜あ〜あ
 一 けつとてあ〜あ〜あ〜あ

ハキア 花の影をくぬぐい掛すの
 ツコイ 飛去りくも影やまらば
 トキ 夕暮の影をくぬぐい
 フタ 夕暮の影をくぬぐい
 ヤキ 夕暮の影をくぬぐい
 アホタ 夕暮の影をくぬぐい
 ミカニ 夕暮の影をくぬぐい
 マウ 夕暮の影をくぬぐい
 シメ 夕暮の影をくぬぐい
 夕暮 夕暮の影をくぬぐい

夕暮 七夕の西風吹く掛つて遊
 ヤキ 夕暮の影をくぬぐい
 フタ 夕暮の影をくぬぐい
 ヤキ 夕暮の影をくぬぐい
 アホタ 夕暮の影をくぬぐい
 ミカニ 夕暮の影をくぬぐい
 マウ 夕暮の影をくぬぐい
 シメ 夕暮の影をくぬぐい
 夕暮 夕暮の影をくぬぐい

寛政七
卯年喜

紀州美山
加勢田屋平右衛門

書肆 日
山崎屋嘉吉

大坂の海橋小久太町
塩屋忠吉

（Faint vertical text, possibly bleed-through or a list of names)

乃村

乃村

乃村

乃村

